

日本の未来に 問われる 民主主義

豪ノーチラス研究所
リチャード・
タンターさん



私が核兵器のことを考える時、出発点となるのはいつも被爆者の存在です。日本の被爆者の経験は、核兵器がいかに非人道的なものであるかを私たちに教えてくれます。また世界のヒバクシャは、核による被害の経験を共有しています。オーストラリアでは1950年代にイギリスが砂漠で度重なる核実験を行い、先住民がヒバクシャとなりました。

私のこれまでの研究や活動の原点にあるのは、いつも戦争の犠牲者の存在でした。平和の問題に関心を持つようになった一つに、私の両親がイギリス出身であることが関係しています。第二次大戦中、英軍の空襲で多くの犠牲者が出たことを、私たちの家族はいつも考えていました。もう一つのきっかけはベトナム戦争です。当時オーストラリアでは徴兵制度が施行され、男性は19歳の誕生日に政府に登録され、毎年、くじのようにランダムに徴用されました。当時19歳の大学生だった私は幸運にも免れましたが、多数の同世代が徴兵され、兵役拒否をした人々は拘置されました。

75年の12月に、インドネシア軍が東ティモールを侵略しました。私はその頃ニューヨークの大学院にいて、半分は研究者、半分は運動家として活動していました。70年代の終わりには東ティモールや反ウランの運動に参加し、イギリスのCND (Campaign for Nuclear Disarmament) と似た形の反核運動“People for Nuclear Disarmament”では代表として活動し、83年に10万人規模のデモを展開しました。84年の総選挙では、「核軍縮党」のキャンペーンマネージャーとして動きました。この取り組みはある程度の成功を収め、2~3年後には「緑の党」に発展しました。緑の党の活動には今でも参加しています。

しかしながら、語弊を恐れずに言えば、恐らく私はいわゆる「平和主義者」ではないでしょう。これまで研究してきた東ティモールの独立平和のためには、どうしても警察力が必要な場面がありました。しかし軍事力が引き起こす最悪の結果をどうにかしたいという思いがあります。私はもともと社会学者なので、軍事構造だけではなく、我々の文化としての軍事化を分析する必要があると考えます。もし「平和主義者」だったなら、もう少しはっきりと軍事力を否定するのでしょうか。

89年~03年は京都精華大学で国際関係論を教えていました。私が初めて日本に来た70年代は安保世代の影響が強かったのですが、89年には日本の学生は明らかに議論やデモをしなくなっており、その変化に驚きました。講義で日本による朝鮮半島の植民地化の歴史を話すと、学生の多くは新鮮に驚き、ビデオを観せるとその悲惨さに涙を流しました。そしてよく「先生、なぜ私たちは今までこのことを知らなかったのですか?」との質問がありました。日本の今後の平和を考えた時、これは大変ショックなことですが、日本の侵略の歴史を語らない歴史教育が行われているのは事実です。

日本の最近の潮流を私は「平成の軍事化(Heisei militarization)」と呼んでいます。この動きは現在も続いています。自衛隊はグローバルな米軍再編の一部を担っており、さらにもう一つの側面として、いわゆる「グローバルNATO」への参加の方向性が見えます。豪軍はNATOと一体となってアフガニスタンに国連治安支援部隊 (ISAF) を展開しています。また日本でも陸上自衛隊をISAFの一員として派遣すべきとの意見も出てきています。これが実行されれば、自衛隊の多数の犠牲者が出ることになるでしょう。

ブッシュ・ドクトリンの下での米軍の侵略に日本も進んで参加していったことは非常に深刻です。リアリストは日本の国際的な責任として軍事化を進めるべきとしています。これは1910~20年頃の日本に見られたような、時代遅れの考え方です。今、日本が直面している本当の安全保障上の脅威は気候変動やエネルギーの安全保障、またはSARSやインフルエンザのような伝染病などの国境を超える問題です。これらは科学的に予想できますが、北朝鮮の「脅威」は、その結果を予想することはほぼ不可能です。また、これまで世界で構築されてきた軍隊や兵器システムは、新しい脅威の前では全く役に立ちません。国益ではなく、人間の利益、人間の安全保障が最も重視されるべきです。真の安全保障のアジェンダを、市民運動も政府も考えなくてはなりません。

すべての問題の根底に通ずる日本政治の構造的危機はずっと続いています。構造が変わるまで、現在進行している危機も続くでしょう。これは日本の民主主義の問題です。日本の民主主義の確かさへの問いにも繋がります。日本が被爆者のいる国として独自の安全保障を推進すれば、国際社会はそれを無視できず、新しい展開が期待できるはずですが。(談。まとめ、写真：塚田晋一郎)

リチャード・タンター

「安全保障と持続可能性のためのノーチラス研究所」上級研究員、RMIT 大学ノーチラス研究所豪支部代表。89~03年、京都精華大学教授。03~05年、オーストラリアン・ディフェンス・カレッジ戦略防衛研究センター・安全保障研究プログラムのシニア・カリキュラム・アドバイザー。専門は日本及びインドネシアの安全保障。